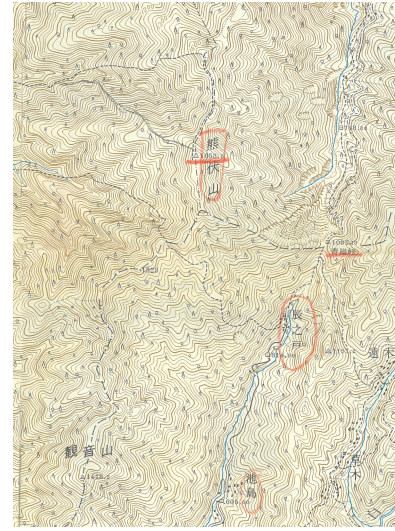


久弥と五万分の一地形図と赤鉛筆と

その32

昨年秋号で元旦の山について書いたが、その時「青崩峠、熊伏山」についての文章を見つけられなかったと書いた。ところが、深田久弥と山の文化を愛する会会員で東京にお住いのY氏からお便りを頂いた。青崩峠、熊伏山について書いた文章が「人のいない山」で『瀟洒なる自然』に収録されているとのことであった。不明を恥じつつ、『深田久弥山の文学全集』から「人のいない山」を探し出した。雑誌『學鏡』に発表され、のちに『瀟洒なる自然』に収録された作品であった。

五万分の一地形図は「満島」で地勢図「豊橋」の一番である。この地形図にある赤鉛筆は、「池島、辰之戸」二つの町の名前を丸で、



「熊伏山」を四角でかこみ、「青崩峠と熊伏山の標高」にはア
ンダーラインが引いてあった。熊伏山頂から
らの下山ルートは、登山道の印のない尾根に、
鉛筆で引かれていた。

「人のいない山」は昭和三十八年十二月三十一日から翌年一月三日までの避衆登山の記録である。久弥たちは、例によって人の行かない山を探した。熊伏山である。

「暇があれば五万分の一の地図を拡げて、どこか人の行かない山がないかと探しているへソマガリでなければ、目につかない山である。高さ一六五三メートルなら、丹沢級である。よし、そこへ行こうということになった。」

一行は、東京から豊橋へ行き、豊橋で飯田線に乗り換え水窪で降りた。そこからバスで終点の池島へ、そして最奥の部落辰之戸まで一時間ばかりを歩いた。大晦日の晩は、辰之戸の民家に泊めてもらった。一夜明けた元日、いよいよ熊伏山を目指して出発。青崩峠を経て熊伏山に至った。熊伏山は南アルプス光岳の西南西約十九キロで、長野県内にあるが、静岡県境から僅か六百メートルばかりの位置である。下山ルートは山頂から西に延びる尾根を平岡（満島）に下り、そこで宿をとった。翌朝一番のバスで、秋葉街道の宿場町、上町まで行った。そこから小川路峠を越えて伊那谷へ下った。この小川路越えは、約三十年前光岳の帰りに辿った道で、その当時は人通りもあつたが、今回は誰一人にも合わなかった。伊那谷最初の部落で、むかし宿屋をしていたという中華料理店に泊めてもらった。翌一月三日は天竜川まで歩き、飯田線の駅から列車で帰途に就いた。

この一冊

先日、資料を整理している時、一冊の本に出合った。昭和十八年三月発行の『山と高原』四十七号である。表紙の上部に「国民錬成雑誌」とあつた。雑誌の冒頭には、時代を反映する記事が、いくつか掲載されていた。



聞こう会

会場：深田久弥山の文化館 聴山房
時間：午後一時三十分～三時

五月十七日（日）

演題：深田久弥の足跡探訪 パート2
講師：高辻謙輔氏（深田久弥研究家）

六月二十一日（日）

演題：山を想えば人恋し、
人を想えば山恋し
講師：関本邦晴氏（日本山岳会会員）

読書会

会場：深田久弥山の文化館
時間：午後一時三十分～三時

五月二十二日（金）

『日本百名山』より「吾妻山」

*本年度より、五、七、九、十一、三月の
開催になります

ホームページもよろしく

https://yamanobunkakan.com

深田久弥山の文化館



山文HP